

令和5年度学校防災教育実践モデル地域研究事業の取組

愛南町教育委員会
愛南町立家串小学校

1 取組の目的

- (1) 南海トラフ巨大地震に備え、発災時・避難時・避難後に分け、自分のとるべき行動を学ぶとともに、危機予測・回避能力を身に付ける。個人として、地域とともに生き抜くための主体的に行動する態度を育成する。
- (2) 拠点校を中心として教職員の防災教育力の向上を図るとともに、地域とともにある学校として、地区住民との連携を図りながら、校区・地域の防災意識を高める。

2 取組の内容

- (1) 事業内容説明、防災マニュアルの見直し・整備 【4月18日(火)】

年度当初の職員会議において本事業の概要を説明し、全教職員で研究事業の内容や年間計画などの共通理解を図った。また、「防災マニュアル」を見直すなかで、昨年度の実践から多くの問題点が浮かび上がった「被災時の引き渡し」について協議した。新たな取組として「引き渡しカード」を作成して各家庭から申請のあった必要枚数分を配付し、引き渡しの際に提示を求め、確認して引き渡すことにした。

- (2) アンケート調査(5月、11月) ※ 拠点校を中心としたアンケート

5月に教職員・児童・保護者・地区住民を対象に「防災に関するアンケート」を実施した。南海トラフ巨大地震に関する認識や、避難場所の把握、共助の意識などについて実態を把握した。その結果、避難所運営や共助の方法、行政の南海トラフ巨大地震対策に不安や課題を感じていることが分かった。

11月に実施したアンケートでは、全体的に防災への意識は高まりを見せているが、地域間に意識の差は見られた。

- (3) 実践委員会

実践委員会の構成メンバー20名で以下のような内容を実施した。

第1回：事業内容の概略説明と年間事業計画の検討【7月4日(火)】

第2回：防災教育に関する実践的取組の検証、今後の課題や取組の検討【8月28日(月)】

第3回：講演会「自然災害に正しく備える」【10月29日(日)】

第4回：研究事業の検証と今後の取組についての協議【12月3日(日)】

- (4) 家串小学校避難訓練(地震・津波想定) 【4月12日(水)～※毎月1回実施】

南海トラフ巨大地震・津波を想定した避難訓練を毎月実施した。4月の避難訓練では、1年生にサルのポーズやダンゴムシのポーズ、避難経路、二次避難場所を指導し、2年生以上にはこれまでの学びや実践を再確認させた。2回目以降についても、学年に応じた目標を設定し、児童自らが考え行動できる避難となるように、様々な状況を想定して実施した。



第1回避難訓練
【4/12】
○命を守る方法と避難場所を知る。自助の方



第2回避難訓練
【5/9】
○高台への避難方法の習得と共助の意識を持



第3回避難訓練
【6/16】
○土砂災害発生時の避



第4回避難訓練【7/12】
※保育所との合同避難訓練
○保育所園児の命を守るために何ができるのかを考え、実践する。



第5回避難訓練【9/13】
○避難場所への移動中に余震が起こった場合、どのような避難行動をとればよいのかを考え、実践する。



第6回避難訓練
【10/18】
○負傷者が出た場合や学級担任が不在の場合は、どう対応すればよいのか



第7回避難訓練
【11/20】
※予告なし①
○休み時間に地震が発生した場合、児童自らが適切な避難行動を考え、実



第8回避難訓練【12/18】
※「シェイクアウトえひめ」への参加(予告なし②)
○突然に地震が発生して教員からの指示が一切ない場合、児童自らが適切な避難

(5) 防災遠足 【5月1日(月)】

これまで校区内探検として行ってきた遠足を防災に特化した「防災遠足」として実施した。異学年縦割3班に分かれ、ウォークラリー形式で校区内の避難場所や防災倉庫を巡った。防災倉庫の鍵の管理者や備蓄品を確認し、実際に避難した場合に役立つようにした。



(6) 防災さんぽ 【5月21日(日)】

「家族と一緒に避難場所まで楽しく歩いてみよう。」という目当てで実施した。避難する際、ブロック塀が倒壊したり土砂崩れが起こったりしそうな危険な場所はないかなどを、家族で確認しながら歩いた。複数のルートを実際に歩いたり、メモを取りながら歩いたりする家族もあった。



(7) 引き渡し訓練【6月18日(日)】

授業参観後に引き渡し訓練を実施した。令和4年度の実施後の協議で、「迎えに来た人の確認方法は適切だったか。」が課題となった。そこで、「引き渡しカード」を作成して配付した。今回の訓練では、カードの提示を受け確実に児童を引き渡すことができた。

今後の課題として、発災時に迎えに来ることができるかなどについて、保護者と協議する必要がある。



(8) 家族防災会議【6月18日(日)】

引き渡し訓練後に、初めての試みとして「家族防災会議」を実施した。話合いの中心は、「防災リュックに必要な物がそろっているか。」で、「軍手や懐中電灯なども入れたほうがよい。」などの意見が出た。また、家族がばらばらに避難しなければならなくなった場合に、「目立つ場所に避難先を知らせる張り紙をする。」という意見も出た。



(9) 防災ワークショップ【7月19日(水)、8月29日(火)】

7月のワークショップでは、愛媛大学防災情報研究センター二神透副センター長を講師に招き、ハザードマップを見て学校や自宅が津波災害警戒区域や土砂災害警戒区域内にあることを確認した。その後、「我が家の防災行動計画(マイ・タイムライン)」作成の指導を受け、夏季休業中に家族で話し合ったり確認したりするきっかけにすることができた。第2回実践委員会で、各自治会にもマイ・タイムライン表を配布してはどうかという意見も出た。

8月のワークショップでは、カードを使って防災リュックの中身を考えたり、HUG(避難所運営ゲーム)を行ったりした。防災リュックは、児童同士でどんな物を入れているかを確認し、「水は全員入れている。」「私は、少しでも水を使わないように食料は乾パンを中心にした。」など、意見交換をした。HUGでは、運営主体の立場になることを意識して、「避難してきた人々を、様々な条件によってどこに配置するか。」や「使える場所と使えない場所を選別する。」など、それぞれの考えを出し合った。「家が近所の人たちはなるべく近くにしてあげたほうがよい。」「高齢者はトイレの近くにしてあげたらよい。」「保健室を使用禁止にした班があるけど、病気の人が出た時はどうするんだろう。」などの意見が聞かれた。



7月のワークショップ：マイ・タイムラインの作成



8月のワークショップ：HUG(避難所運営ゲーム)



(10) 高知県(黒潮町)視察研修【7月28日(金)】

地域住民と行政が一体となって先進的な防災対策に取り組んでいる高知県黒潮町の視察を行った。まず、高さ25mの津波避難タワーを見学した。津波によって流されてくることが想定される自動車や倒壊した建物の一部等の衝突を防ぐための支柱や階段の滑り止め、防音機能等、住民が実際に訓練し、協議したからこそ施された工夫が随所に見られた。防災語り部グループ「防災かかりがま士の会」会長の講話からは、何より「自分たちでできることは自分たちでやろう。」という気概が伝わってきた。それが行政や地域住民を動かし、次々と防災対策が改善され、防災活動を核とした好循環が生み出されていると感じた。家串小学校でも、視察内容を参考にして、「地域住民に自分自身の情報カードを作成してもらうように呼び掛けよう。」という提案があった。



黒潮町佐賀地区避難タワー



避難タワー見学



「かかりがま士の会」会長講

(11) 家串小学校防災参観日・防災講演会 【10月29日(日)】

防災参観日の授業は、学年の発達段階に応じて、クイズやゲーム形式を取り入れながら、防災への備えや避難行動、避難所で使える道具作りなどに取り組んだ。親子で自宅の家具の固定状況を振り返ったり、新聞紙を使って食器を作ったりした。親子で南海トラフ巨大地震に備える意識を高め、実際に被災した場合に役立つ物の作り方を学ぶ良い機会となった。

公開授業の題材

学年	教科等	題材名
1年	学級活動	ぼうさいゲーム
2年	学級活動	地しんからみをまもろう
3・4年	学級活動	さい害時の生活について考えよう
5・6年	学級活動	災害が起こったら、どう行動する？



第1学年学級活動

防災講演会では、「自然災害に正しく備える」と題して、愛媛大学防災情報研究センター二神透副センター長が、今年度の防災ワークショップの総まとめをした。最後に防災ゲーム「クロスロード」を行ったが、自分の避難行動の根拠を明確にできる高学年も多く、これまでの取組の成果が表れた。



防災講演会の感想発表

(12) 家串小学校区合同避難訓練 【10月29日(日)】

拠点校として、児童が率先避難者となり、近隣住民に避難を呼び掛けることや、地域住民の津波避難への意識向上をねらいとして実施した。家串小学校では、防災学習の中で「率先避難者」になることを指導してきたが、いざとなると大きな声で避難を呼び掛けることができない児童が多かった。今後の取組の中で、実践力を付けるための手立てが必要である。

地域住民は、一次避難をした人数に地域間で差があった。また、非常持出袋や頭部を守るヘルメット等の備えにも個人差があった。まず、「逃げよう。」という意識になってもらうこと、そして、一次避難場所にいる間に必要な物を各家庭でそろえておくことなどをどのように啓発していくかを、実践委員会を中心に各地域自主防災組織に働き掛けていく必要がある。



(13) 5・6学年総合的な学習の時間「災害時の食を考えよう」 【11月14日(火)】

避難訓練等の様々な活動を通して「災害時の食を考えよう」を総合的な学習の時間の課題に設定した。防災食の種類やローリングストックについて調べたり、実際に避難場所で調理する計画を立てたりした。平落地区自主防災組織の中川氏を講師に招き、自主防災組織の活動についての座学や学校裏の避難場所での調理を体験した。強風等の気象条件や使用できる水の量が限られるなど、通常の調理よりかなり困難や制限を伴うことを実感できた。



(14) 防災学習成果報告会 【12月3日(日)】

保護者・地域住民の防災意識の向上と避難所運営への理解を深めるために、まず大人向けのHUG（避難所運営ゲーム）を行った。二次避難後の生活について、想定外の事態が同時多発的に起こることが実感できたようだった。また、このような地域住民が主体となった防災学習の必要性も痛感したようである。最も優先すべきは「自助」であるが、地域から一人も犠牲者を出さないためには、「共助」についても地域から声が挙がることを期待したい。

本事業の成果報告については、中核教員が、今年度拠点校として取り組んだ内容を報告し、その検証から得られた成果と課題について参加者に問題提起した。また、3・4年児童は、防災学習の実践から自分自身の意識が向上したことや身に付いた実践力について発表した。5・6年児童は、「災害時の食を考えよう」という課題について、調べたり実践したりしたことの中間報告をした。

参加した保護者・地域住民からは、「いざという時のために、家庭での話し合いをしておかないといけない。」「避難所運営ゲームをしたことで、次々と解決しないといけないことが起こり、予想以上に困難だということを実感した。」「小学生から防災の大切さを学んだ。是非、地域住民にも伝えてほしい。」などの感想や意見が出された。



ワークショップ：大人版HUG（避難所運営ゲーム）

防災学習成果報告会

3 取組の成果

- (1) 避難訓練を毎月実施したことにより、児童は教職員の指示がなくても自分の命を守る行動がとれ、迅速に高台に逃げることができるようになっている。
- (2) 研究事業の拠点校として、保護者や地域住民、地域内の保育所と合同避難訓練を企画・実践したことにより、児童の「共助」の意識が高まるとともに、地域内全体に「誰一人取り残さない」や「連携して地震・津波から命を守る」という雰囲気を醸成することができた。
- (3) 教職員は、防災教育に関する研修を受講したことにより、地震・津波対策への意識が高まった。今後、愛南町内の小中学校において、防災学習指導の中核を担うことが期待される。
- (4) 保護者・地域住民は、啓発活動を通して、南海トラフ巨大地震対策への関心が高まり、研修や地域合同避難訓練への参加が大幅に増えた。

4 今後の課題

- (1) 児童の「自助」に関する意識や実践力は確実に向上した。しかし、「共助」については、学習したことが「いざ」という時に発揮できない場面もあった。有事の際にためらわず行動する力を身に付けるために、指導方法を改善する必要がある。
- (2) ダンゴムシのポーズや防災頭巾に関することなど、教職員が常に防災に関する最新の情報を収集・整理・共有し、児童の指導に生かさなければならない。
- (3) 拠点校として、保護者・地域・近隣校と課題を検証し、それに基づいて系統的・継続的な実践へとつなげることが必要である。
- (4) 防災に対する意識・備えの地域間格差がある。今後、地域自主防災組織の活性化を目指して、先進地域の取組を参考に、組織内の役割分担の明確化など、積極的に啓発していく必要がある。